

第九節 反体制戯曲への監視と弾圧（第一年九月『瓦斯』）

反戦運動や反体制思想を取り締まる官憲の監視は、早くも築地小劇場の柿落しに向けられたが、その四ヵ月後産業社会を批判する戯曲『瓦斯』の大幅な削除が命じられた。作品の性格と弾圧の結果については、同劇場の顧客浅野時一郎の劇評が貴重である。

『瓦斯』に対する検閲・弾圧（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

秋のシーズンは九月二日に『瓦斯』の爆発で蓋を明けた。ゲオルグ・カイゼルの芝居の初登場である。・・『瓦斯』第一部。この芝居では最初の幕で工場の瓦斯が爆発する。瓦斯製造の公式に誤りがなかつたにもかかわらず、瓦斯が爆発したことがわかつた時、工場主の取つた態度は特異であった。彼は技師追放要求のストを蹴つて、一步進めて工場を閉鎖し、緑の田園にかえてしまおうとするのである。瓦斯製造を続ければ再び爆発が起ころうだと考えたのだ。しかし、その意向が伝わると、今まで技師排斥を叫んでいた労務者が態度を変える。煽動する技師と呼応して工場再建を叫び出すし、一方政府は兵器工場確保のために工場主を圧迫する。工場を占領され、投石で傷ついた工場主の、人間実現のむなしい夢を訴えるのが修景である。それに答えるものは、未亡人になった娘が、亡夫の遺児を産みましょうという言葉です。

第一次大戦直後の作品らしい厭戦気分もあるが、機械文明を否定して、工場を緑野にかえそうというのは、原始的人道主義のにおいもする。・・・観念的な、どっちかといえば穏やかな芝居のはずであるが、それをいっそう穏やかにしてしまつたのが検閲の力であった。

昔の芝居は始終検閲で脅かされていた。それは左翼でも工口でも同じである。時には不条理な神経質が、権力をかさに着て横行したものである。この芝居では第四幕が目の敵にされていた。瓦斯の爆発で肉親を失つた労務者たちがこもごも立つて、悲痛な訴えをする場である。せりふが削られて、なくなつてしまつた役もあつた。伏見直江の初舞台がサイレントになつたのはそのためである。山本も田村もしやべることが短く、尻切れどんぼになつていた。

客席の最後列の一端を少し高くして、電灯と机を備えた臨監席というものが、どこの劇場にもあつた。築地小劇場にも作られていて、そこには脚本を持つた巡査が来ている。初日が明いてからでも、効果の上がりすぎると、カットの追加を受けるのだった。もちろん上演台本は初日の十日前までに、警視庁検閲係の手元に提出して、許可をもらわなければ上演できない。その許可がたいていは初日直前に下がる。もちろんそのままの台本ではない。そこで、やれカットだ、やれ上演中止だと、劇場側はしばしば大混乱を生じるのであつた。

ひどいカットをされても、劇場側は大金をかけて準備したものを放棄するわけにはゆかないの、ご無理ごもつともで命令に従うことになる。時には作者にも見物にも、相済まないものを涙をのんで上演することになつた。それが戦後なくなつたのである。

夏の間のご無沙汰が長かつたので、私は初日を兼ねて見物した。カットはその時もわかつたが、数日後には

もう一度行くと、前記の幕などがまた一段と短くなっているのであった。土方与志の回想では、その演出した百ぐらいの芝居の中で、検閲のカットを受けなかつたのは十五ぐらいしかなかつたそうである。客席にて検閲の暴力ということを痛感させられたのは、この芝居が最初であった。①

大正十三年九月築地小劇場で上演された『瓦斯』については、検閲の痕跡を確認できる台本が保存される。六六年後に復刻された『築地小劇場上演検閲上演台本集』全十二巻に含まれるからである。台本『瓦斯第一部五幕』は全文細字で手書きされ、冒頭には「警視庁／大正十三年九月壹日／検閲済／支障ナシ（三木）」の査証が刻印される。

浅野時一郎の証言でも伝えられとおり、この脚本でとくに苛酷な監視を受けたは第四幕であった。第四幕の前半を構成する頁数十六において、ト書きを含む総計二二九行のうち、実に一四七行が消去された。台本では削除を命ずる台詞等には太い斜線が引かれたが、その一端を復元する本稿では該当部分を空色により明示する。なお、原本には判読困難な細字がしばしば含まれる。②

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』七四一七六頁。

② ゲオルグ・カイゼル著・黒田礼二訳『瓦斯』（『築地小劇場上演検閲上演台本集、第二巻（夜の宿・瓦斯）』ゆまに書房、一九九〇年。一八九一一八九、二七一—二八六頁。

ゲオルグ・カイゼル作・黒田礼二訳『瓦斯』（『築地小劇場上演検閲上演台本集』）
第一年度第六回公演 九月二日より十一日まで

第四幕

混泥土の会館、固くて煙っぽく天井が高い。円天井から塵埃のちらつく丸ランプの光がさして居る。中央は狭くて喰しい鉄の演壇が立つて居る。労働者の集会を現わす。中には多数の女も混つてゐる。—すべて沈黙。

小さい声から段々高くなつて行く。誰だ！

一人の娘演壇のほうへ立つて行く。

娘
(手を高く挙げ) 私です。(沈黙)

娘 私は自分の兄のことを申し上げます！私には一人の兄がいたのかどうか、知らなかつた位です。

一人の男が家から早朝に出て行つて、夕方帰り、すぐ寝て仕舞う。さもなければ夕方家を出て、朝帰り、すぐ寝て了う。一方の手は大きくて、他方の手は小さかつた。大きい方の手は汚なかつた。何時でも動かしてゐた。あちこちと。昼でも夜でもそれは兄の体を喰つて育ち、その全体の力を滋養分として生長した。その手だけが人間だったのです。どこに私が兄がいました？ 切ない時は私と一緒に遊んだ。両手を砂いじりなんかして遊んだあの兄は？ 彼は労働に身を投じたそうです。女労働は兄にただ一本の手だけを要求しました。横杆を押しては揚げ、揚げては押し上から下へ、下から上へと正確に一時計の音の刻む様に動かし

て居ました！一寸の間も手を休めることができぬ。拉杆を少しの間違いもなく几帳面に敲いて、女前に兄は

○人の○になり、一生懸命に従事していました。ですから一度も失策をしなかつた。一度も数の違いをしなかつた。兄の手が頭に数へさせていたのです。頭はただ手の言うことだけを聴くようになつて居たんだから！そんな悲惨な状態だけが兄に残つて居たんです！いやそれも残りなく打つた。或日の正午に不意に電光が閃いた。あらゆる間隙や穴から焰の波が押し寄せてきた。女處は火爆発が起つて、兄の手を喰つてしまつた。兄は最後まで残したものを○してしまつた。—それでも少なすぎると言いますか。雇主が兄を傭はないで、兄の手を傭つたためにです。兄は○○す○引もしたというんですか？彼は人の兄となることを広め、只全身を数を刻む手のなかへ握り締めたかたとお考えですか。彼は最後にたつた一本捕らえたその手で、支払つたじやありませんか？その支払ではまだすくな過ぎますか。エンジニアを出してしまつまで、私の兄は今私の声となつてこう叫ぶのです。誰も労働者へ○れるな。尠なくともエンジニアが工場からくるまでは。労働しちゃいけない。—これが私の兄の声です！

娘 (壇を降りる) それが私の兄自身です！ (娘下つて群衆のなかへ這入る。) (沈黙)

声 (更に新しい波打つて来る) 誰だ！

母 (一人の母壇に上がる) 私です！ (沈黙)

一人の母の子は爆発で粉微塵となりました。子息って一体何です。焰が舐め尽したのは何ですか？私の子息だつたとお考えですか？女人○を私は○らなかつたのです。或る日の暗い朝に彼を工場勤めさす為に、お葬いに出してからもう殆んど見たこともなかつた人間です。工場では只検査函をじつと二つの目で睨んで動かなかつた。それは只の二つの目でしようか。それとも一人の子息でしようか。私の子供は何處に

いるー私は一つの口にて可愛いく笑む、手足も活発でに振り動かされる小供を産んだ筈だつたが！私の子供はー私の子供は私の首に囁り付いて戯れてみた。そして嬉し相に私に接吻して呉れて居た。あの私の小供ですか？私の小供ですか？私は母親ですか？私は母親ですか？私は母親です。ーが今は々々しく溜息はつかぬ。溢る叫び声は咽喉の中へ押し込み、外には出さぬ様にしてみます。私は母です。母として腹を立てたり訴へたりはしない積りです。ーが私がやるんじやないー此の○の○は居る私の小供が訴えて居るのです。一度私の胎を出て幸せに生まれた小供が死んで又もや私の腹の中に戻つて来た。ー母より生まれ、母に戻つた。私の子息は又もや私の身体の中に宿つて居る。それが私の血篋のなかで暴れる。私の舌を無理にも動かして思わず知らず大声で○○叫ばせる。ーお母さんーお母さんはもう私の處に居ては呉れないんだ！お母さん！お母さんは私をひとりぼっちに放つて置いたんだ。ーお母さんーお母さんはあの検査函を叩き壊して呉れ一寸の指ほどの長さの弱いものじやないか。蠅の羽根の様な脆い物じやないか。ー何故其弱い検査函を自分で壊して呉れない？何故それを壊さない為め悲惨な犠牲となり○いては母親の悲しみとなる様になつたじやないか？何故自分の○○を不具にした。ー全身の力と眼を集めて只じつと睨め付けて居る為めかしら？何故そこへ火花が飛び込んで来て眼を突き戻したんだろう？何故か。小供は一切を残さなければならぬかしらー何ひとつ要求しないで？小供の一身の損害位じや足りないの？此處に一人の母親が居ます。ー而して彼處には例のエンジニアが○ます。

(母どもは互いに押し会○○、合い身と寄せあわし)

女ども それは私の子息だ！

母

此のお母さん、此のお母さん、このお母さんー此のみんなのお母さんたち中に自分の子息が斯

う叫んでいる！我々を締め殺したくなけれど、工場へ近寄つて下さるなー工場へ○○ー彼処にはエンジニア
が居る！

女 工場へ近寄るな！

母 (演壇を下り女どもの中に這入る) (沈黙)

声 (こは高く) 誰だ！

妻 (壇に上つて) 私です。 (沈黙)

婚礼の日は一日続いた。其の日の午后はピアノを奏いた。お客様たちは部屋の中で踊った。
いつち日ー朝からー正午とーそれから夜にかけて。私の夫はその一日私の傍らに居ました。朝から正午と、
それから夜にかけて。其一日が全一生でした。・・・工場は私の夫よりも重要なものでせうか？其の夫は
僅か一日の結婚の日を楽しみー翌日からもう終生死んで了つたあの男よりも大切でしょか。労働者は動物
見たいなものだからーひとり死ぬりや別の動物を以て埋め合わせるー而して工場は前と同じ様に活動を続け
て行かれるんですね。どしどしたるかへ引きかへしてー仕事丈は何時までも続けていくのですね？夫の為
にもう校横を握らせて下さるなー夫は為めてもう検査函を見続ける仕事をさしてくさるなー私の夫の為に
発動○の上に乗せて下さるなーエンジニアが皆さんを放逐するのです。ーエンジニアが皆さんを放逐するの
です！

妻ども (壇の周囲に櫻が登る) 私の夫のために働くな！

娘ども 私の兄の為に働くな！

母ども 私の子息の為に働くな！

(妻演壇を下る、一人の労働者代りに壇に上る)

労働者 娘よ！此の俺が兄だ！誓つて言ふ俺が兄弟だ。誓つて言ふ俺が焼け死んだのだ。今では爆発の
壊れ物の下敷きとなつて地上に横はつて居る。お前が横杆を握れと言ふまでは○たふひーとは微○とあつた
お前のためよーそれ此処にあの手があるーコトコトと○る横杆の○で把手を掴むか○めよこんなにペちゃん
こで、またこんなに硬ばつて来る！次の手で賃金を儲けて来たのだ。ーその金は○の凹みに集つたーそれを
受取るが早いか、手は急いで家族に帰る。然し手は賃金がいくらあるか数えて見たりなんかしない。其の儘
抽斗の中へ投げ込んで置く。転て箱は賃銀で一杯になるー然しそんな金は役に立たぬーお前の兄さん全体を
殺したーあの手だけで何が買えるかね？唯一の手とー其から箱にぎつしり詰めた賃銀とどが何だ？手には
支払はれて居るーがお前の兄さんには支払はれて居ない。それが焼け死んだー今俺と云う生きた人間はなり
代つてここに立つてゐるー此処に俺があり貸しになつてゐる賃銀の為めに絶叫して居るーすなわちエンジニ
アを追つ払へーエンジニアを追つ払へ！

多数の労働者 (演壇の周囲に騒いで) 兄弟は俺だ！

①

ゲオルグ・カイゼル作『瓦斯』配役

第十回公演 大正十三年九月二日ー十二日 每夕七時

書記 || 友田恭助

白い紳士 || 汐見洋

技師 || 千田是也

労働者 || 竹内良作

富豪 || 青山杉作

富豪の娘 || 吉野光枝

士官 || 生方賢一郎

労働者 || 小野宮吉・藤輪和正・浅野浩・横田傳

娘 || 伏見直江

母 || 山本安英

妻 || 田村秋子

政府代表 || 汐見洋

大尉 || 丸山定夫

黒い紳士 || 東屋三郎・汐見洋・竹内良作・丸山定夫・隅田竜郎

演出 || 土方与志

配光 || 岩村和雄

効果 || 和田精

装置・衣裳 || 美術部

①

なお『瓦斯』は大正十四年二月にも再演されるが、台詞のほとんどを削除された娘役の伏見直江と母役の山本安英が、この際には配役一覧から消された。

この月配布された機関誌『築地小劇場』には戯曲『瓦斯』の荒筋とカイゼルの略歴が解説された。主題は纖維部門における産業災害であり、大幅に削除されたのは、犠牲者の家族および同僚の悲痛な訴えである。なお、これの解説者、北村喜八自身の諷刺劇『猿から貰った柿の種』も、やがて三年後大幅な削除を命じられる。

北村喜八「カイゼルの三部作（瓦斯第一部）」（『築地小劇場』第一卷第四号）

ゲオルグ・カイゼルの『珊瑚』『瓦斯第一部』『瓦斯第二部』は三部作をなすものである。彼は思想の豊富さ、能力の偉大さ、技巧の多様さに於て、表現派の戯曲家中でも一つの謎である。そして、或時は氷のや

① 水品春樹著『新劇去來—築地小劇場史』一二六、一三二二頁。

うに冷たい皮肉の眼を以て肉の喜劇をつくり、或る時はプラトン流の思想劇に走り、或時は心靈のフィルムを試みて主人公の魂の姿を暴露し、或時は社会の虚偽に対する挑戦状を草して戦を宣言する。・・・

『瓦斯第一部』に於ては大規模に瓦斯が製造される。瓦斯はあらゆる水力や動力に勝るものとして、あらゆる機械に、あらゆる工業に使用されている。・・・この瓦斯の工場が爆発した。技師の公式には些かの誤りも無かつた。人智の及ぶ限りは尽されてゐた。しかも爆発したのである。

これは瓦斯製法そのものの中に爆発する要素があるからである。であるから瓦斯の製造を継続することは、第二、第三の爆発を予期しなければならない。これを感じたのは百万長者の息子唯一人である。

彼は瓦斯製造の無意義を感じる。そして。多くの労働者が瓦斯製造の機械に必要な一本の手、一本の足、一つの眼になつて、人間としての自己を忘却し放擲している恐ろしさを感じる。そのために彼は、この無意義さから脱れ、人間性へ帰るために、緑の森林と緑の牧場の大植民地を空想しその計画を摶めている。

然し、労働者達は工場を再建し、労働へ、機械への復帰を主張する。実業家の代表もこれを要求する。國家の代表もこれを命令する。機械は再び動いた。瓦斯は再び製造されるのである。

この曲では一人目醒めた百万長者の息子は、人間が機械から脱れ、人間としての意義と存在とを全くするために、緑の森林と緑の牧場の大植民地へ、大地へ帰る事を主張している。

ゲオルグ・カイゼル小伝

ゲオルグ・カイゼルは一八七八年十一月二十五日、マアクブルクに呱々の声を挙げた一田舎者である。父はフリイドリッヒと云つて商人であった。母はトミ・アントンと言つた。カイゼルはマアクブルクの僧院で若い頃の教育を受けた後、商人となつて三年間南米のベノス・アイレスで過した。西班牙・伊太利を通つて、

再びマーカブルクに帰つて結婚し、その後ゼエハイムやワイマアルや、その他諸處に移り住んだ。何時頃か戯曲に筆を染めたか明らかでないが、諸所に移り住む間に多方面な傾向と様々ん色彩の奇怪な戯曲をつくり上げた。①

カイゼル作『瓦斯』が辛苦して供された翌月、今度は戯曲『作者を探す六人の登場人物』が官憲の俎上に載せられる。「十月二五、二六、二七の三日間はピランデルロの『作者を探す六人の登場人物』を上演した。これは初め上演不許可になつたのを、奔走して非公開の形で行われたのである。」② この作品の構成と内容はかなり奇矯であるが、同月配布された冊子『築地小劇場』には、筋書きの核心が紹介された。

蛇頭生「作者を探す六人の登場人物」(『築地小劇場』第一卷第六号)

それは家庭悲劇である。

- 一、教養ある父は、尋常なる女たる母と婚す。
- 二、二人の間に口数少く意地悪き子を挙ぐ。

① 北村喜八「カイゼルの三部作(珊瑚、瓦斯第一部、瓦斯第二部)」(『築地小劇場』第一卷第四号)

三〇、三二一三三頁。

② 水品春樹著『新劇去來』三二、一二八頁。

三、母、夫の秘書役と通ず。

四、父これを知りて、母情人と共に家を棄つるに任す。子を手許にとどむ。

五、数年後母と情人は田舎に潜みて、父達いの娘、男児、幼児を挙ぐ。情人物故す。貧窮迫る。母三子と共にローマに出て仕立屋となる。仕立屋の女主人卑しき渡世をなしおりて、父達いの娘をそそのかして淫をひきがしむ。

六、父、父達いの娘の漂客となる。

七、母この事実を知りて、大いに驚きてこれをさまたげんとす。

八、父は母および三子を自家に連れ来る。嫡子なる子は、三人の私生児を軽蔑す。

九、やがて六人は互いに不自然なる位置に置かれあるを知る。

十、この重苦しき空気にこもる家庭にて、家人の監視怠りしかば、幼児庭の池に陥ちて溺死す。

十一、父達いの娘、恐怖の余り家を去る。

十二、昔の如く父、母、子のみ家に残る。

①

会員限定三日間の上演ながら、寄せられた劇評からは、演出者・演技者の努力と観客の好感・支援が挙げできる。

倉橋弥一「作者を探す六人の登場人物」（『築地小劇場』第一巻第七号。）

この芝居が風紀上いけないなら、日々の新聞紙は当然差しとめねばなるまい。併しこうして三日なりとも上演できるのは嬉しいことである。私は初日にみた。開幕前土方氏が練習不足のようにもうされたが、父になつた横田が幻想と現実を一度間違えていつたほかは、みな驚くべき出来であった。・・・
役者はこの頃だんだんうまくなつて行く。横田、東屋の二氏の努力は感謝に値する。私は千田の息子をあげたい。立派な出来である。

のぶゆき 無題（同書）

何という悲痛な場面であろう。「うわあ、素敵素敵、こいつあ新しい、こいつあ素敵だ、おい幕だ、幕だ」
一またしても我が監督者のブチこわしな声がする。そこで監督と主人公を我々の席にのこして本当の幕が下りてしまふ。・・・

誰だつてこんな妙な劇は見た事がないに決つていてる。外国の何処かで演出した際観客が皆承知せずに怒り出したというのは本当の事であろう。それ程この劇は舞台と観客の距離をなくしている。・・・
花柳氏の娘は又素晴らしい出来栄えである。初めはもう少し平常の態度が蓮つ葉でもよいと思つたけれど、矢張自ら不可抗的な運命に力づけられている、絶望的な人生觀にとらわれた人間としてあの様な表現法をとる法が完全に近いと思わせられた。・・・

自分は瓦斯と共にこの土方氏の今度の演出を好む。土方氏の演出は力と理解がこもつてゐる。この日も友達と愉快な満足した氣持で劇場を後にすることが出来ました。厚く御礼を申し上げます。 ①